

1 2 3 4 5 6

今、日本の金融になにが起っているのか？

金融ビッグバンによって、急激に変化しつつある日本の金融。業態や商品への規制が緩和され、新しい金融サービスが続々と誕生している。

規制が多く機能不全だった日本の金融

金融とは文字通り、お金の余っている人から足りない人にお金を融通し、世の中で使われずに眠っているお金を有効活用するしくみのことを指します。

例えば私たちは、当面使う予定のないお金を銀行に預けることが多いですが、このお金は銀行を通じて企業などに貸し出されています。このしくみのおかげで、私たちはお金を預けただけで利息が受け取れますし、企業は借りたお金を使って新しい工場を建てたり、生産設備を買ったりして、ビジネスの規模を拡大することができます。

お金の余っている人から足りない人にお金を融通するときの仲立ちをしているのが、銀行や証券会社といった金融機関（↓P 24）であり、人々からお金を集めるための手段として利用されるのが、「預金」とか

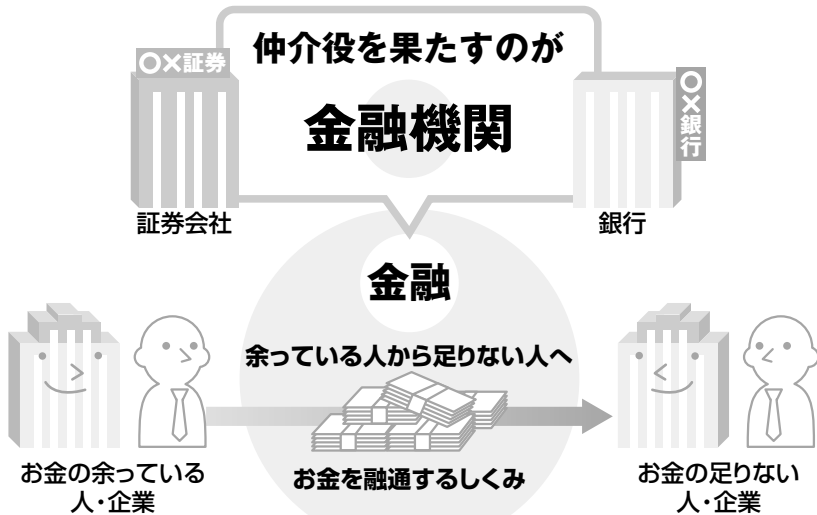
「株」とか「投資信託」といった金融商品であるといえます。こうした金融のしくみがあるおかげで、こうして世の中のお金が有効活用され、その国の経済全体が活発になるわけです。

ところが、これまで日本の金融には規制が多く、その機能が十分発揮されていないという指摘が以前からありました。日本人の個人金融資産の総額は1400兆円にもものぼるといわれますが、その大半は銀行預金と郵便貯金となっています。企業の資金調達も、銀行からの借入れが中心でした。つまり、お金を提供する側から受け取る側へとお金が流れる道筋が、極めて限定的だったのです。

お金の流れを多様化させる金融ビッグバン

そこで政府は、金融機関の活動や金融商品などに関するさまざまな規制を緩和することで、お金の流れの

お金を融通するのが金融の役割だ



お金を融通しあうための道具が



これまでの日本の金融では
このお金の流れが限定的だった
(間接金融中心)

一連の金融制度改革(ビッグバン)により
この流れが多様化、
日本の金融は大きく変わりつつある

道筋を多様化させ、今まで以上に世の中のお金の有効活用を図ろうと、金融行政の大改革を実施しました。「金融ビッグバン」と呼ばれたこの一連の改革は、2001年春までにほぼすべて完了。これによって日本の金融のしくみは急速に変化しつつあります。

第一勧業銀行、富士銀行、日本興業銀行の3行が統合して「みずほフィナンシャルグループ」として始動したのを皮切りに、わずか数年の間で大手銀行の大規模な合併・再編が進みました。外資系金融機関の日本上陸も増加し、かつては考えられなかったソニーやイトーヨーカ堂、ソフトバンクといった異業種企業の金融業参入も増えました。インターネットで株を売買できる「ネット証券業」が普及したおかげで、株式投資も今までよりずっと私たちに近づき、身近になりました。「投資信託」をはじめとする金融商品も多様化し、人々にとって資産運用の手段が豊富になりました。反面、誰もがさまざまな金融商品についての知識を、しっかりと持つことが必要となっています。

業態区分が緩和され手数料も自由化へ

一連の金融制度改革の内容はさまざまですが、特に

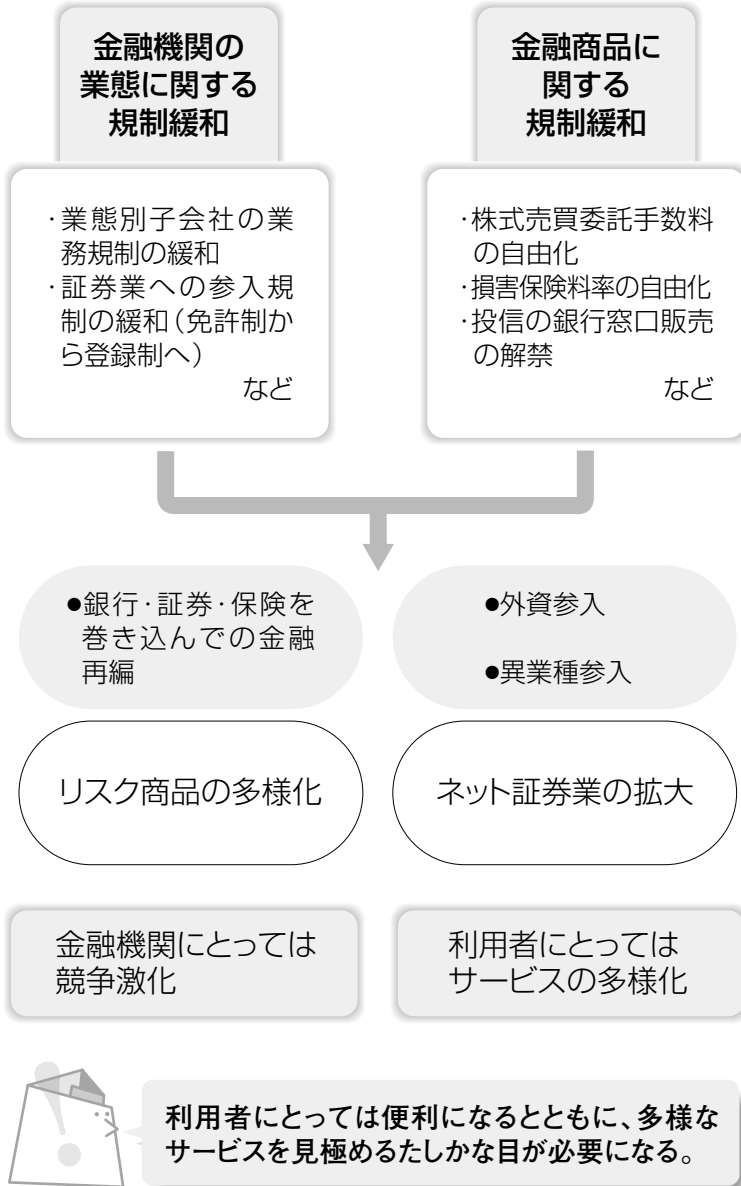
影響の大きかったのは2つです。

1つは、金融機関の活動に関する規制の緩和です。これまでは銀行・証券・保険といった業態が厳格に分けられ、兼業することができませんでした。この業態区分が徐々に緩和されています。外国金融機関の日本への参入規制も緩和されました。海外では、銀行・証券・保険などを一手に扱う総合金融機関が数多くあり、いずれ日本にも本格的に上陸してくる可能性があります。現在、日本で銀行・証券会社・保険会社を巻き込んだの大規模な金融再編が起こっているのも（P140）、この外資の上陸を迎え撃つためです。

もう1つは、株式売買委託手数料の自由化や投資信託への規制の緩和、損害保険料率の自由化などの金融商品に関する規制の緩和です。投資信託を銀行窓口で販売することも可能になり、投信などのリスク商品が普及したのもそのためです。また手数料自由化を背景に、ネット証券業の利用も急速に広がっています。

こうして規制が緩和されて新規参入が増え、既存の金融機関も新しい業務を手掛けるようになったことから、当然のように日本の金融業界の競争は激化しています。規制緩和を上手に利用して、利用者を満足させ

業態・商品に関する規制緩和が進む



るような新しい金融サービスを提供できる金融機関は
いっそう成長するでしょうし、逆に利用者の期待に応

えられない金融機関は淘汰されていくはずですが。生き
残りのための提携・合併は、今後も続くと思われる。

2

金融機関には どんな役割があるのか？

お金を融通し、社会の資金循環の根幹を支えているのが金融。経済活動を正常に保つには、金融システムが健全であることが不可欠だ。経済活動を正

余っているお金を集め融資に活用する

文字通り、金融機関とは「金融」を仕事としている機関です。金融とは「当面は使わないお金を、現在お金を必要とする別の人に融通することですから、余剰資金を持つ人と資金を必要とする人とを結びつけるのが金融機関の仕事といえます。例えばAさんがボーンナスをもらい、銀行に預けておくと、そのお金は新しい機械を買いたいB社や、家を買いたいCさんに貸し出されているわけです。

仮に金融機関がなければ、例えばある会社が支店を増やしたいと思っても、資金が貯まるまで待つか、親戚・知人などから借り集めるしかありません。開店まで何年もかかるでしょう。また、誰かにお金を貸したいと思っている人がいても、金融機関がなければ、借手を手を自分で探して回らなければなりません。

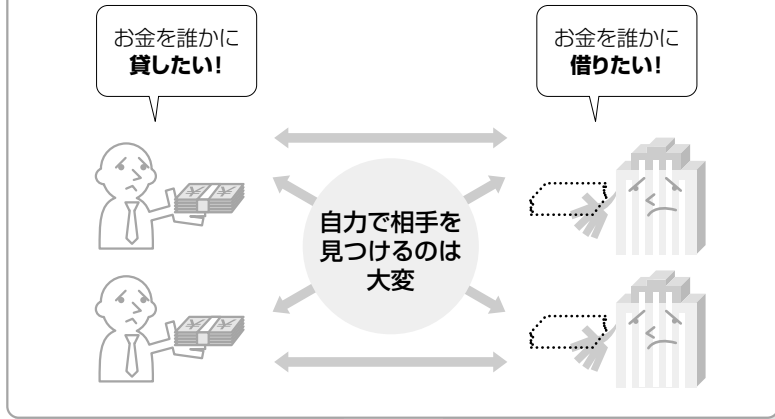
金融機関がないと、一方では余剰資金が使われずに眠り、一方ではビジネス・チャンスがあっても資金が足りないので事業をはじめられない、ということになります。金融機関があることで、「お金を持っているけれどしばらく使う予定がない」という人のお金が、経済活動に利用され、利益を生み出すのです。金融のおかげで、世の中の経済活動はより活発になっていくわけです。

金融システムは経済の「血管」である

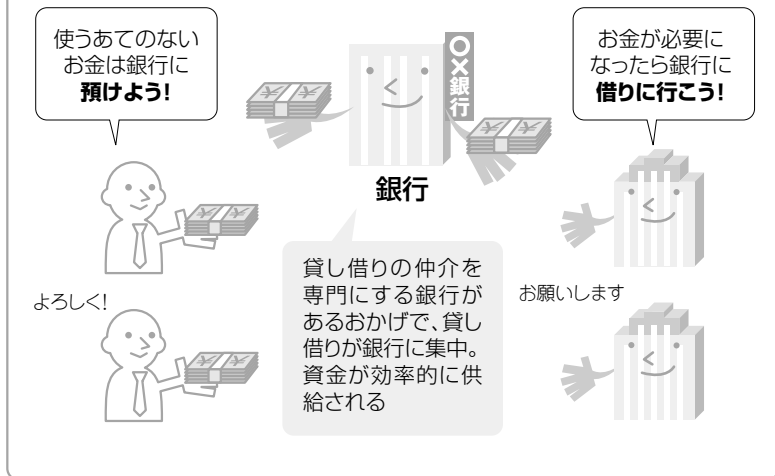
金融システムはしばしば経済の「血管」にたとえられます。金融機関の経営が破綻してしまうことは、この血管が破れたり詰まったりすることを意味します。例えば1990年代末の日本では、多くの銀行の経営が悪化し、それを背景に企業の活動も停滞したため、日本全体が大不況に陥りました(↓P.112)。

銀行はお金の貸し借りの仲介をする

金融機関がなかった場合……



金融機関があるおかげで……



お金という血液の供給を断たれば、経済は健康体

ではいられないのです。

3

直接金融と 間接金融の違いとは？

銀行などからお金を借りるのが間接金融で、株や社債などを発行し資金を調達するのが直接金融。今後は後者の比重が増すと予測される。

銀行は、借りてから貸す「間接金融」

一般に、金融活動には、直接金融と間接金融の2種類があります。

直接金融とは、お金の出し手（投資家）がお金の使い手（企業など）に直接資金を提供するというタイプの金融取引です。株や社債（↓P 74）を利用した取引がこれにあたります。

株や社債は、企業が人々からお金を集めるために発行するものです。例えば私たちは、A社が発行した株を買うえばA社にお金を出資したことになります。株を買うときの仲介役をするのは証券会社ですが、証券会社はA社と私たちの単なる橋渡しをしているだけで、私たちは証券会社にお金を貸すわけではありません。また、A社の株を買うときに仲介者となったB証券会社が万が一破綻しても、私たちにはなんの損害もあ

りません。あくまで、私たちはA社に出資したわけで、B証券会社の経営状態とは関係ないわけです（ただし、A社が倒産すれば、株や社債はほとんど紙くず同然となり、A社の株や社債を購入した人は、損失を被ることになります。↓P 56）。

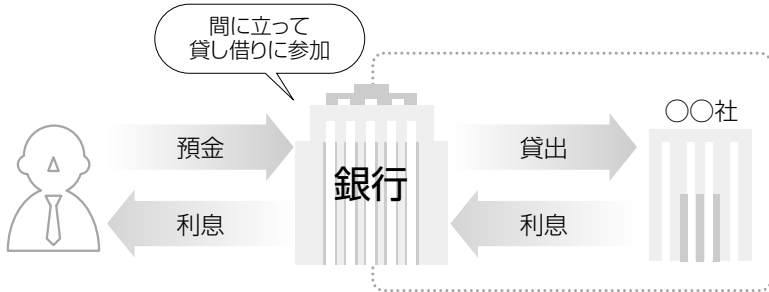
これに対し間接金融とは、実際のお金の出し手から金融仲介機関がお金を借りて、それを改めて実際の使い手である企業などに貸し付ける、というタイプの金融取引をいいます。

銀行を通じてお金の貸し借りがこの例で、例えば私たちがC銀行に預けたお金は、C銀行を通じてD社に貸し出されています。この場合、私たちの取引相手はあくまでC銀行で、D社ではありません。

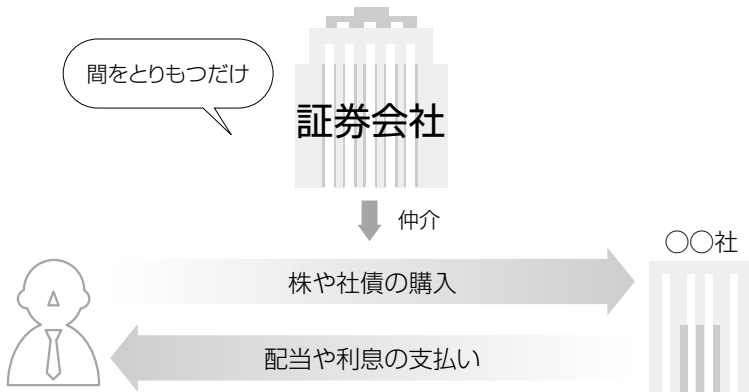
仮にC銀行から融資を受けていたD社が倒産しても、私たち預金者には直接関係がありません。原則として約東通り預金を払い戻してもらえるので、安心し

銀行と証券会社の取引はどう違うのか

銀行 … 間接金融 （ お金の出し手とお金の使い手はそれぞれ独自に銀行と取引 ）



証券会社 … 直接金融 （ 証券会社の橋渡して、お金の出し手とお金の使い手が直接取引 ）



銀行は預金と貸出の金利の差で儲け、証券会社は手数料で儲けているんだ。

て預金できるわけです。

企業としては、間接金融は直接金融に比べ、効率がよく便利なものです。いちいち株や社債を発行して広く人々から直接お金を借り集めるのは手間と時間がかかりますが、銀行を利用すれば、銀行と話をつけるだけでまとまった資金を手にできるからです。

また多くの先進国では、金融業に一定の規制を設け、銀行が経営破綻して預金者に損害をかけないように監視しています。そのことにより、国民が銀行を信頼し、「お金はタンスに隠しておくより預金したほうがいい」と考えるようになれば、金融システムの中を循環する資金が増えるからです。社会の余剰資金が経済活動に回されて利益を生めば、それだけ経済の成長に貢献します。

だから経済発展のためには、その国の金融——特に間接金融システムの安定が不可欠なのです。

企業の資金調達には直接金融が有利

一方直接金融の利点は、企業と投資家が直接取引するので、銀行などを利用するよりも低い金利で資金が集められるということです。

銀行は、人々からお金を預かるときの金利よりも、企業などに貸し出すときの金利を高くし、その差額を儲けにしています。簡単にいえば、企業としては、銀行から借りず、債券を発行して人々から直接お金を借りたほうが、安い金利でお金を借りられるわけです（証券会社に支払う売買手数料などは必要です）。特に優良な大企業は、社債を発行して投資家から直接借りたほうが、銀行融資より低い金利で資金を調達できます。

ただし、直接金融には全員が参加できるわけではありません。例えば、ほとんど無名の小さな会社が社債を発行しても、「本当にちゃんと金利を払ってくれるのかなあ？」と人々からなかなか信頼してもらえず、お金が集まりません。

お金を出す側にもそれなりの資金力やノウハウが必要されます。株は、それぞれ銘柄ごとに購入単位が決まっており、一定額以上用意しないと買えません。また、株や社債を発行した企業が潰れてしまったら大損害ですから、いくつかの銘柄をあわせて購入する必要もあります。どの銘柄をどれぐらい買うべきか判断する能力も必要です。

間接金融と直接金融はどう違うのか

	間接金融（銀行預金）	直接金融（株式・社債）
お金の 出し手に ついては……	<ul style="list-style-type: none"> ・少額から手軽に利用できる ・銀行が設定した通りの利息を受け取れる 	<ul style="list-style-type: none"> ・資金力と投資ノウハウが必要 ・投資先の業績次第で得られるお金はゼロにも多額にもなる
お金の 受け手に ついては……	<ul style="list-style-type: none"> ・銀行の審査を通れば、無名の会社でも資金を調達できる ・銀行が設定した通りの利息を支払わなければならない 	<ul style="list-style-type: none"> ・無名の会社が株や社債を発行しても、資金は集まりづらい ・信用力が高いと、投資家から低コストで資金を集められる



資産家や優良企業にとっては、直接金融のほうが有利なシステムなんだよ。

このように一般に直接金融は、資産家や優良企業にとっては間接金融よりも有利なシステムといえるけれど、小口の資金の貸し借りにには不利な面があるといえます。

近年では企業の「銀行離れ」が進む

なお、日本では戦前から、直接金融に比べて間接金融の比重が大きく、特に銀行を通じた貸し借りが重要な役割を果たしてきました。

しかし近年では、株や社債を通じて資金を調達しようとする企業が増えています（これを「銀行離れ」といいます）。

また、2002年4月にはペイオフが解禁となり（P134）、人々にとって銀行預金がこれまでのように絶対に安心な貯蓄手段とはいえなくなりました。

その一方で、株式のネット取引の普及など、個人の投資家が株式投資をしやすいつつあります。しかも長らく低金利が続いていることもあり（P98）、株や債券などに投資をしようとする一般の投資家も増えており、直接金融の比重は今後徐々に増えていくと見られています。